

論文要旨

東アジア文化研究科・2014年度・デジタル時代の人文学における文化交渉・永崎研宣

デジタル媒体がいよいよ紙媒体の役割の多くを代替しつつその特性を活かした新たな可能性を現前させつつある現在、紙媒体を基盤として発展してきた人文学は根本的な変革を迫られつつある。すでに1940年代に始まっていたこの変革への道筋は、デジタル技術の発達とともに、徐々にその領域を広げ、インパクトを高めつつある。ここには、デジタル技術の文化と人文学の文化という交渉の平面とともに、人文学におけるデジタル技術の導入という局面における欧米先進国の文化と日本を含む東アジアの文化との交渉という平面とが生じている。本論文が目指すのは、この二つの平面の実相を明らかにし、そこから紡ぎ出されうる将来像を描き出すことである。

ここでは仮に、デジタル技術の文化を、その計算可能性や情報伝達の手軽さ、複製の容易さといった技術的基盤によって形成された、新しく、オープンで、活発な文化であるとしておこう。これに対して、分野としての人文学はその周縁が曖昧であり、それゆえに、その文化についてのとらえ方もやや曖昧なものになってしまうが、哲学・史学・文学という古典的な枠組みにおいては主にテキストを対象としてそこから人類の文化にとって有益な新たな知識を汲み出そうとする営みである。対象がテキストだけでなく、それに伴って様々な研究手法が生み出されていった場合でも、その営みの基本には変わりはない。このことは、デジタル技術の進歩によるデジタル媒体が重要な役割を担いつつある現在であっても同様である。

しかしながら、デジタル媒体は、そのメディアとしての特性から生じてきた文化を伴っており、それは必然的に紙媒体を前提とした文化とは異なる文化を内包している。この文化の由来としては、デジタル技術から比較的直接的に生じてきたものと、デジタル技術の情報流通の速さによって、紙媒体の時代には比較的長い時空間のなかで緩やかに行われてきた交渉が急激に進化したことによって生じてきたものがある。後者はむしろ本論文で扱おうとするところのデジタル・ヒューマニティーズ（以下、DH）における欧米と東アジアの文化の交渉として捉えることも可能だが、前者は、主に、欧米においても東アジアにおいても、人文学の文化がデジタル文化に対して共通に課題とする部分となる。そして、グローバル化が進む現代社会においては、後者の問題は同時に前者の問題ともなり得るという関係が成立しつつある。それゆえ、それぞれの平面において両者を分かちものは何か、それを橋渡しするには何が必要なのか、ということを検討することは、人文学にとって今や必須の課題となりつつある。そこで、本論文では、この平面が交差するところに生じつつある人文学の現在を描写するとともに、デジタル技術の具体的な活用手法を通じてその将来像について検討する。

そのような観点から、第一部では「人文学の文化とデジタル文化の交渉」として、現在、この動きを象徴的に引受けている学問領域である DH の淵源から現在に至る流れとその背景について、デジタル技術から導かれる社会的文化的状況とそこにおける人文学という観点から検討する。第二部では、デジタル以前の媒体との関わりを視野に入れつつ、東アジアの人文学として有力な分野の一つである仏教学においてデジタル文化が介入してきている状況を分析する。まず、現在のデジタル媒体へと接続していくとされる口承から筆写、活版印刷という流れを押さえつつ、東アジアにおける木版印刷と活字文化についても検討を行なう。さらに、デジタル文化との交渉のなかで変化しつつある仏教学の枠組みの現状についても検討を行なう。第三部では、筆者が関わるプロジェクトにおいて次世代人文学の枠組みを構築していくために試みられてきた様々な取り組みについて報告し検討する。ここでは、Web の普及によって実現性が高まってきた、人文学研究に関心を持つ様々な立場の人々の比較的自由な人文学への参加について検討を行なう。さらに、東アジアに特徴的な文化資料の扱いに関して、文字コードやテキストの要素といった観点で議論の余地が大きいことから、デジタル文化が要請するところの標準化と人文学における共有基盤との齟齬と今後の可能性について検討するとともに、その解決策を提示する。

以上の検討を通じて本論文が明らかにするのは、日々進化を続けるデジタル技術を背景としたデジタル文化が、それに比較して長い時間をかけて確立してきた人文学の文化を変えていくことについての具体性を伴った見通しである。とりわけ、閉じたコミュニティでの集中的かつ互恵的な研鑽から開かれた場での緩やかな営みへの移行は、人文学分野全体の縮小傾向への解決策の一つとしても避けがたいものであり、デジタル文化と人文学の文化との交渉の中で落ち着くべきところを探していく必要があるが、同時に、欧米先進国の文化と東アジアの文化という違いに適切に配慮していくことも不可欠である。そして、この二つの交渉の平面が交差しつつその全体が変遷していくことは、我々が直接向き合うべき個別の課題を浮き彫りにしていくと同時に、さらに新しい課題を明らかにしていくことにもなるだろう。よりグローバル化が進み、よりデジタル媒体への依存度が高まっていく時代にふさわしい人文学の枠組みは、そのようにして次第に形を成していくことだろう。